



INAX MUSEUMS

INAXライブミュージアム

NEWS LETTER

特集

染付古便器の魅力

vol. 05 | 季刊 秋
2007



表紙写真
「今日は私の誕生日なんです」という、お二人と「黨のある広場・資料館」で出会いました。思い出に残る一日でありますように…。 (2007.9.8)

表紙撮影：加藤弘一

[特集] 染付古便器の魅力

02 染付古便器の源流「青と白の美」
3つの特色を持つ瀬戸の染付
美しい便器は新しい時代の象徴？
雄弁に時代を語る染付古便器

LIVE REPORT

06 開催報告
第1回 光るどろだんご大会&表彰式

07 みんなでどろ遊び どろんこ広場で遊ぼう！
[企画展関連講演会]
建築の母なる大地 父なる空 香山壽夫
[企画展] やきもの新感覚シリーズ

LIVE SCHEDULE

08 これからの催し

特集

染付古便器の魅力

Charm of Blue-and-White Pottery Toilets of Olden Times

日本人が、こよなく愛する青と白の染付のやきもの。その華麗な文様が、便器を飾る。見るものを圧倒する染付古便器の美しさと存在感。なぜ、日本人は便器を美しく仕立てたのだろうか。中国、景德镇から始まる染付の歴史をたどりながら、「美しい便器」の誕生を探ります。



▲幸田露伴住宅「鱈牛庵」(建設/明治初期、博物館明治村) 廊下をはさんで、露伴の書斎の奥にある便所。牡丹に鳥の文様、周囲には内側まで草花文が施された染付の角形大便器が設置されている。(『日本トイレ博物館』INAXより 撮影:伊奈英次)

常滑から

4

街角のモザイクタイル



常滑には、かつて多くのタイルメーカーがあり、モザイクタイルもつくっていました。今年は、当社創業者の伊奈初之丞が日本で初めてモザイクタイルの試作に成功して百年になります。

常滑の街を散策していると、そこかしこに小粒のタイルを使った壁や床を見かけます。かつて賑わいを見せていた細い路地の、ともすれば見落としてしまいがちなショーウィンドウの腰壁に、水色の窯変釉のタイルを見つけました。素晴らしいタイルです。それは釉を重ねてきたお店でしょうか、それでも「生涯現役！こゝ、変わらない輝きを見せる小粒のタイルがとても印象的でした。」

身近な場所に気軽に張れて、ちょっとびりリッチな気分させてくれるタイル。これからも魅力ある歴史を刻んでいくことと思います。

竹多 格 (主任学芸員)

* INAXが生まれ育った常滑のやきものや土に関わる人、風景、できごとなどをスタッフが伝えます。

染付
古便器
の魅力

白地に青い文様—おそらく日本
のどの家庭にも一つはあるだろう
染付の器。中国では「青花」、英語
では「Blue & White」と言われるこ
のやきものは、古くから日本ばか
りか、イスラム、ヨーロッパ、アジア
など多くの国々で愛されてきた。

染付古便器の源流
「青と白の美」

始まりは約700年前、中国・
元(14世紀)の景德鎮窯。「青花」の
「花」は文様の意味。単色の白磁と
青磁が主流だった時代、この装飾
性豊かな青と白の瑞々しい磁器の
出現は、どんなに衝撃的だったこ
とだろう。当初、それらの多くはイ
スラム圏へと運ばれた。その技術
は北ベトナムや朝鮮半島へと伝わ
り、大航海時代には重要な貿易品
としてヨーロッパに輸出される。

日本には、豊臣秀吉の朝鮮出兵
の際に連れ帰った李朝の陶工によ
って磁器とともに伝わり、17世紀
の初めから佐賀県有田周辺で生産
が始まった(有田・伊万里焼)。素地
は白くて硬い磁器、その上に「呉須」



青花牡丹唐草文盤
景德鎮窯(中国)
明時代(14世紀)
高6.0cm 口径34.0cm
底径22.0cm
愛知県陶磁資料館蔵



染付吹墨鶯文皿
有田(佐賀県)
江戸時代前期(17世紀)
高3.0cm 口径19.3cm
愛知県陶磁資料館蔵

鳥形の型紙の上から呉須を
吹きつけた後、目や足などを
線描きで加えている。吹墨手
中皿の代表的な意匠の一つ。



「あつま きん魚」
1838~1912年
山口県立萩美術館・
浦上記念館蔵

3つの特色を持つ
瀬戸の染付

愛知県瀬戸市でも19世紀初め
から、染付が始まる。「磁祖」と言
われる加藤民吉が1807年に
九州から磁器技術を学んで帰り、
それを伝えると、瀬戸の染付磁器
生産は飛躍的に発展。幕末から明
治にかけては、特注の茶道具や壺、
花瓶といった贈答品、富裕な商家
を対象とする高級磁器食器を生
産した。磁器以前のやきものを「本
業焼」、磁器を「新製焼」と言い、瀬
戸は以後、両者を生産していく。そ
して明治に入ると、有田にかわり、
染付磁器の海外輸出ナンバーワン
の産地となった。

明治以降のやきものを研究する
服部文孝さん(瀬戸市美術館学芸員)
は、瀬戸の染付の特徴を三つあげる。
一つは、南画系の絵師による「絵
画的な絵」。二つめは「呉須」。世界
的に呉須を産出する地域が少な



染付花鳥図花瓶

加藤紋右衛門(六代)
明治時代前期(19世紀)
高30.2cm 瀬戸市蔵

磁器製。紋右衛門の遺情園
地紋工場は、花、草、鳥など、
暮らしのなかにある身近な
素材を描くことを得意として
いた。また、その技術力を生
かした大物製品の製造でも
有名だった。

呉須
情園
地紋

美しい便器は
新しい時代の象徴?

いなか、瀬戸では呉須が産出した
のだ。三つめは「素地」。瀬戸の粘土
は白く焼けるため、磁器にも耐火
性の高い粘土に陶石のような石を
混ぜて使った。
「鮮やかな白とコバルトブルーで
はなく、瀬戸独特の青みがかった
白い素地に、黒味がかつた青がの
ることによって、日本人好みの落ち
着いたやきものになる。そこに、素
人にも「きれいないいいな」と、わか
りやすい水墨画的な絵が施してあ
る。これが瀬戸の染付の特徴です」
と、服部さん。

六代加藤紋右衛門(1853-1919)
は、熱心に磁器を研究し、国
内ばかりか海外の博覧会でも高い
評価を受けた。瀬戸を代表した窯
元の一つ。その紋右衛門が、なんと
染付磁器の「便器」をつくっていた。
「遺情園地紋製」という号を入れた、
まさに特別注文の高級品だ。海外
に輸出する美術品と同じように、
成形し、細やかな絵付けをして、
釉薬をかけ、焼き上げた美しいや
きもの「染付便器」。だが、何の
ために注文したのか、興味を抱か
ずにはいられない。江戸時代から
培われてきた染付に代表される高
い文化と、醸成された磁器生産技

という酸化コバルトを主成分とした
絵の具で絵を描き、透明の釉薬をか
けて高温で焼成する。土も窯も違
う日本で、それは試行錯誤を重ね
ながら完成されていったのだろう。
1630年代になると磁器中心の
生産体制が整い、有田・伊万里焼
の生産量は急増。1640年代半
ばには全国に流通、芸術性を高め
ながら、海外にも進出していく。
今まで見慣れた肉厚の陶器と
違う、新しいやきもの—硬くて薄
くて、しかも日本人好みの白地に
青の繊細な絵柄。染付磁器は江戸
で、京都で、たちまち人々を魅了し
た。江戸後期になると、京焼(京都)、
瀬戸焼(愛知)、美濃焼(岐阜)、湖東
焼(彦根)など、日本各地で技術開
発がなされ、生産が始まる。また
磁器生産の技術がない地域でも、
陶器に白化粧土を塗り、呉須で
絵を描く「染付陶器」が盛んに生
産されるようになった。

当時の浮世絵のなかには、染付
の陶磁器が多く描かれている。器
ばかりでなく、筆や硯などの文房
具など、思いもかけないものも染
付のやきものでつくられていた。青
と白の染付が、いかに人々の心をつ
かんだか、また職人がそれに応え
る仕事をしたかがわかる。染付の
やきものは当時の最先端産業、夢
を乗せたベンチャービジネスだった
と言えるかもしれない。

術が出会い、この便器をつくらせたとはいえないだろうか。

時は明治。産業技術の進歩が、人々の生活、風俗や日常の習慣までも激変させた時期だ。「美しい便器の出現」は、一方で、新しい時代の



朝顔形小便器
花のように口の開いた形も美しい。

雄弁に時代を語る 染付古便器

古便器蒐集家の千羽他何之さん（華道家・古流松應会副家元）と染付古便器との初めての出会いは、今から17年前。東京都渋谷区・東郷神社の青空市だ。「参道を上りきった砂利の上に、大胆な筆遣いの染付の小判形大便器が輝くさまを見た時の衝撃は、今でもはっきりと覚えています」と、千羽さん。「実はその時まで、染付古便器の存在を知りませんでした。ただ純粋に

一つの象徴と言えるかもしれない。人々の暮らしのなかで、便所もまた今までは違う位置づけになる。戸外にあったものが家のなかに入ってくる。生活空間の一部になる。そこに芽生えたのは、清らかに保ちたいという「清浄の思想」だったのか。

陶磁器製の便器が盛んに出回るようになったのは、明治半ばから大正期頃。染付だけでなく、釉薬のかけ分けがされているものなど、「装飾された便器」は全国に広がっていった。主な産地は瀬戸、



向高

片手柄のような形で、軒下や寒い地方では室内に置いて用便をした（置便）。後に、窓に穴がけられて、向高と呼ばれる小便器に変化した。写真左は青磁釉に文様が描かれたもので、染付から青磁釉のものと考えられる。

加藤紋右衛門（六代）
染付磁器の朝顔形小便器
個人蔵

輸出用の美術品と同じように精巧な文様が描かれている高級品。瀬戸の粘土は非常に成形しやすく、焼いてもひずみが出にくい。このメリットを生かして、便器もつくっていた。

「選情園池紋製」
染付銘



「美しいなあ」と思ったんです。そして、かつての日本人は単に用を足すときの枠組みに、こんなに素晴らしい技を施していたんだと感動しました。」

以後、青空市に行くたびに新しい古便器に出会い、一つ、また一つと収集が始まった。購入者に外国人が多いことに気づくと「日本の美術の海外流出を何とか食い止めなければ」と、さらに熱が入り、5年間で1500点余を収集した。当時はバブル経済期、住宅の建替えが進むなか、壊しがたく捨てがたい、



小判形大便器

明治24年頃に考案された新しい形の大便器。下箱は小判形、金隠しは半円形。丸い成形には、導入されたばかりの石膏型の型起し技術を駆使した。この形は、後の衛生陶器の水洗面便器に採用され、和風便器の基本形となる。便器の縁や金隠しの内側、そしてあまり目に触れることがないだろう金隠しの外側にも、見事な文様が施されている。



角形大便器

それ以前の木製の便器を模してつくられた。初期のものには、金隠しに「はね止め」や「榎木」がついていなかったが（右）、やがてそれらがつくようになり（左）、年とともに装飾性が高められていった。



絵柄はさまざま。同じ文様が小便器にも大便器にも描かれているものがある。写真は右ページ右端の朝顔形小便器と同じ「竹と雀」の文様。



高垣の小径資料館（愛知県瀬戸市）の便所

瀬戸のやきもの主力生産地・洞町の窯元の家を改修、展示している便所。離れの庭下と続きにある。染付陶器の小判形大便器と向高、そして廊下駄がある。廊下駄は、床を汚さないための立ち位置として小便器の前に置かれ、その上に乗って用を足した。



*表記のない便器はすべてINAXライブミュージアム蔵

白地に青軸を縦にかけ分けた「かきわけぐすり」の朝顔形小便器。別名「青竹」。ほかにコバルト青を横に数条流した「虎がけ」など、軸がけを工夫して便器を美しく飾った。



美しい古便器が、一般家庭から骨董市場に出回ったのだろうか。

千羽さんのコレクションの一部が、INAXライブミュージアムの所蔵品と合わせて、一室のある広場・資料館で常設展示されている。木製便器を模した初期の角形大便器や後の小判形大便器、朝顔形や向高の小便器など、さまざまな種類。素地や呉須の色、意匠、技術も、生産地や年代によって、それぞれ違う。「はばかり」の名のとおり、他人の目に触れることがはばかられてきた便所に「室のある広場・資料館」でやっと光が当たった。かつての日本人が生み出した「粹」の世界。今だからこそ、多くの人たちに見ていただきたい」と、千羽さん。

静かな「室のある広場・資料館」のなかで、雄弁に時代を語る古便器。その一つひとつの物語りに、耳を澄ませてほしい。

参考図書／衛生陶器五十五年 日本衛生陶器工業協会（日本衛生陶器工業協会）／瀬戸染付の全貌 世界を魅了したその技と美（財団法人瀬戸市文化振興財団）／別冊大塚 骨董をたのしむ 染付の粋（平凡社）